

どうして勉強しなくちゃいけないの？

大阪教育大学 島崎 英夫

子どもたちが学校に行けない春を、今年は過ごすことになりました。家庭学習をさせなければと、気が気でなかった保護者の方々も多かったのではないかと思います。小学生の子どもがいる若い友人から、こんな相談のメールが入りました。「ゲームばかりせずに勉強しなさい、と子どもにいうと、“どうして勉強しなくちゃいけないの？”と問い返されます。いろいろ考えて返事するのですが、子どもの心に届いているように思えません。どう応えればよいでしょう」と。子どもたちからのこの質問は、わたしが勤務する大学の学生たちが、教育実習中にもっとも頻繁に尋ねられる問いでもあるそうです。学生たちは「将来、何かの役にたつ」とか「未来の選択肢を広げる」とか、懸命に答えるのですが、子どもたちはなかなか納得の表情は見せないそうです。読者の皆さんならどう応えられますか？

まず、「勉強」と「学習」とは、まったく意味を異にします。出産の姿勢を象形する「免」と「力」が合わさった「勉」の字は、新しい命を生み出すために力を込めていきむことを、「弓」と「口」と「虫」の三字が合わさった「強」は天蚕(テグス)という虫が口から吐く強靱な糸を張った弓のことで、戦に際して命がけで強い弓を弾くことを表します(白川静さんの『字統』が出典です)。どちらも、命がけでここ一番の瀬戸際で力を振り絞ること、ですから毎日できるようなことではありません。夏目漱石は百年余りに亡くなりましたが、彼の残した文章の中に現れる「勉強」という言葉は、ほとんど「無理」の意味で使われます。店頭で「勉強しまっせ！」と主人が客に呼びかけるのは「無理してでも安くしますよ」の意味でした。「勉強しなさい」は「命がけで無理しなさい」と言っているのと同じ意味だったのです。机に向かって教科書や参考書を前に問題を解くようなことを「勉強」と呼ぶようになったのは大正の終りから昭和の初めにかけてのことです。大学が狭き門になって苛烈な受験「勉強」が始まったのは、この頃でした。

一方、「學」は立派な羽根飾りや宝玉の散りばめられた大人の帽子を子どもがかぶって喜んでいさるさまを、「習」は胸の毛がまだ白い雛鳥が親鳥を真似て羽根をはばたかせて飛ぶ練習をしているさまを、それぞれ表します。つまり「学習」は子どもがあこがれる大人の姿を真似ていることなのです。学習が成立するためには、真似したいと思うようなモデルとの対話が必要になります。「あこがれ」が強ければ、モデルから「わたしみたいになりたい？ でも、君の努力ではまだまだ」という声が聞こえてくるように思われる、そんな瞬間を経験することがたびたびあります。その都度、地べたに叩きつけられたような屈辱感とともに「なにくそ！」という情熱も沸いてきます。地べたに叩きつけられる存在がサブジェクト subject です。Sub は「下に」、ject は「投げる」こと、この、サブジェクトを西田幾多郎は「主体」と訳しました。人間が主体的に懸命な勉強をしようという気持ちになるのは、あこがれのモデルに投げつけられたような思いをする時からです。まず、子どもたちには、学習の、つまりあこがれのモデルを真似ることの楽しさを伝えたいと思います。学びの楽しさを味わった人は、勉強の厳しさやつらさを堪えることができます。理想とすることに近づけるのですから。理想の社会を実現するための「人権」の学習や勉強も同じことです。立派なモデルとなる大人の存在が欠かせません。「どうして勉強しなくちゃいけないの？」、こう尋ねられたら「勉強したらね、わたしみたいになれるよ」と答えなさいと学生たちには指導しています。それで笑われたら、教師にはなれません。もちろん立派な大人にも。